

弓矢の神も見そなはせ

判官殿も聞こしめせ

君のかたきを今こそと

思ひのまゝに歌はん

しづやしづ賤の小手巻くりかへし

昔を今になすよしもかな

貧女嘆

東くめ子

軒端の松に風絶えて

日影に騒く晝の塵

泣なみむつかりし兒は寝たり いさ此暇に急かなん

あはれ世にある人々は 青葉涼しき山々に

白波よする浦々に 己がむきく遊ふてふ

此うす絹のなつ衣、 我物ならば嬉しきを

流るゝ汗に汚さじと 心して縫ふ苦しさよ

貴女怨

同人

夕顔棚の下涼

おのが儘なる樂は

賤か伏家にありとかや世をしら玉の小簾の中

身にはうすもの纏へとも 手には扇を離さねど

熱き涙のこぼるゝは 冷き人を怨むなり

庭には清水流れつゝ 涼しき風は通へども

胸の思はたきものゝ かやりと燃ゆる夏の暮

夏夜

平もと子

故郷に通ふ夢路の浮橋を

渡りあへぬに明くる短夜

朝顔

東くめ子

日の影にあてじと覆ふ袖垣の

ひまよりにはふ花の朝顔

水郷

須川ゆき子

夕風に岸邊の柳うちなびく

影もすゝしき川つらの里

深夜螢

鈴木金太郎

涼とる人影絶えぬ月も落ちぬ

柳がぐれに螢三つ四つ

長野盲人學校生徒の俳句第一回の吟

長野 飯島八千溪

秋

美しき庭の亂れや秋の風 酒井

大木の吹き倒されし野分哉 同

故郷を物思ふ夜や雁の聲 同

髪のもつれを吹くや秋の風 同

此松に又來てとまれ秋の蟬 宮島

谷あひや紅葉の中を秋の水 同

朝夕は神纏ほしき秋の風 同

そよくと芒にさはる秋の風 同

しんかんと獨の我に秋の蟬

宮嶋

女郎花戀に咲くべき名なりけり

駒村

説林

母と教育

齋藤鹿三郎



昔者、人あり始めて愛子をあぐるや、如何にしてその子を教育すべきかを知らんが爲めに、幾多の教育書を繙きたるが、讀破數卷にして「我はさとれり、我は猶善くならざるべからず」と獨り言をいふた。